慈濟

ものがたり

ツーチー　2018年6月　258

心の道場
道理で以って事を成す

●表見返し　文・證厳法師/訳・済運/撮影・楊秀麗

心に雑念がないのが「精」であり、
間断なく行動するのが「進」である。
日常生活では理で以って事を進め、
心を穏やかにし、法で以って行動すべきであり、
至る所が道場なのである。
心に「道理」を持って法の中で行動し、
法を聞いて伝承して敬虔に法を守れば、
群衆を法で以って悟りに導くことができる

目次

【社論】
時の寛度を高める　慈願／訳　4

【主題報道】
時間は善用すればするほど増えていく　葉美娥／訳　8
心の幅を広げ　生命線を伸ばす　黒川由希／訳　14
無常を念じ　今に力を尽くす　惟明／訳　26

【百の流れは海へと帰る】
有情の世界　本諦／訳　36

【人物誌　台湾嘉義】
菜芯お婆さんの大願　心嫈／訳　39

【親子問題】
こう話せば子供に気持ちが伝わる　閻麗妮／訳　46

【特別報道　独創性豊かな匠の技】
山奥の私塾　懐徳居木工実験学校　青木芳味／訳　50

【證厳法師のお諭し】
仏法は永久にこの世に存在する　慈願／訳　64

【慈済国際　ポルトガル】
ポルトガル森林火災　本諦／訳　76
疑いのない愛　慈願／訳　81
ベストパートナーのジョセ　本諦／訳　92
愛は行動で簡単に示せる　閻麗妮／訳　96

【衲履足跡】
人心の向うところ　済運／訳　98

慈済大事記【五月】　済運／訳　105

表紙

仏典の警告：「１日が過ぎれば、それだけ命も減じていく」。證厳法師は「１日や１時間を惜しむだけではなく、１分１秒も争って、毎日、毎秒とも良いひとときになれるように」と念を押している。今月のテーマ報道では、時間観は使えば使うほど増える。時間の有効利用について分かち合う。（撮影・黄筱哲）

社・論

時の寛度を高める

◎訳・慈願

もしも、人は老衰や病による死亡という恐怖がなかったら、時間が足りないという緊迫感に襲われるだろうか？

證厳法師は「静思晨語」の中で《法華経、如来寿量品》を講釈されている。仏陀は計り知れないほどの時間をかけた修行の後に仏となり、広く衆生を済度したこと、寿命無量であったが、衆生が驕慢で怠惰にならないようにとの警戒心から、人間の法則に則って八十歳の時に入滅されたのだと話された。

ここで述べられていることの意味とは、人は「制限」に直面した時、やっと「自ら進んで行動する」可能性が起きるということである。

社会の変遷につれ、日に日に煩雑さを増すビジネスの場でも、時間を意識するようになっている。名利を求め、さらに経営をよくしたいと考えて、時間を有効活用しようと、苦労して駆け回るが、自分の生命がどれだけあるのかを知らないまま、結局は「死」という終点に向かう。生命の限度に向き合うために、私たちはどのようにして、時を見直したらよいのだろうか？

科学技術会社の執行長だった顔博文氏は、退職した後、すぐに慈済慈善基金会執行長の役目を引き受けた。顔博文氏は、時間の長短の差は「寛度」で補うことができると話す。たとえばデジタル通信の分野では、ブロードバンドにするだけで同じ時間内に送信するデータの量を増やすことができると言う。

「どれだけの仕事を完成させたか」に触れず、時間の伝送量を説明して、事をなすには大衆に利益することが出発点であって、相手の身になって感じれ

ば眼界を突破し心を開拓することができる、たとえ人間関係で何か問題があっても、時を広めて乗り越えられると言う。

台中慈済病院の簡守信院長は生物学の観点から、もしも毎一秒間に精力を徹底的に使い果たしたら交感神経は極度にかたくしめつけられるが、マラソンランナーのように目標がはっきりしていて、リズム感があると、時間を有効に利用することができると説明している。この時間の正確な運用と、それによって身につく自信は、日ごろの行動の蓄積にかかっている。仕事を行う時も一歩一歩着実に行うことだ。細かく視角を切り替えながら自分の生活を観察するよう心がけていると、問題を解決する能力が高められる。

生活にリズム感があると、ゆったりとした落ち着いた気分になる。静思精舎の徳宣尼は、忙しいこととそうでないことはその数量に相当しないと話す。

ただ、足腰がしっかりしていると、時間が迫ってくることへの緊迫感がなく、忙しそうに見えていても、心はゆったりしていると言う。

彼女の観察によると、證厳法師は常に「時間が足りない」、大地が急速に傷つき、自分の寿命もあまり残されていない、とおっしゃっておられるが、終始冷静で、少したりとも焦っている様子は見せられない。実際には、ますます緊迫した状況であるのだが、ゆっくり話されるので、聴く者の心が落ち着く。

今年の年始以来、法師は「寿命宝藏」の概念を提唱されている。それは、五十歳の年齢を預金し、実際の年齢から五十歳を引いたものが心理的な年齢であるとする考えだ。自分は老いたと思わず、休みなく善事を行い、細やかな心で人々のために尽くすと、慧命を精進させ、きちんと計画を立てて、時間を有効に使うことができるのだ。

（慈済月刊六一七期より）

時間 TIME

主題報導

善用すればするほど増えていく

文・李委煌　撮影・黄筱哲　訳・葉美娥

主題報導

時間は全ての人に平等に与えられている心して使えば、時間の豊かさが広がる。

『告白』の著者であり、古代キリスト教の哲学者、聖アウグスティヌスは「人に問われない時、私は時間が何であるか分かっていたが、一旦問われたら分からなくなってしまった」と語った。すなわち、人々は古来時間を使っているが、時間がどのようなものか、はっきり答えられないということだ。

風はどこにあるのか。花や葉っぱが揺れる時に感じられる。時間はどこにあるのか。ふと振り返って見ると、顔の皺や手のしみに時の流れが刻まれているようだ。時間は風と同じように、人々は自分の顔から観察できるのだ。

一日は二十四時間で、一年は三百六十五日である。これは誰でも同じだが、仏教の考えでは、極めて短い時間の単位は「刹那」と呼ばれている。もしも仏教の経典に書いてあるとおりに換算すれば、その瞬間の長さとは零点零二秒にも至らないと研究されている。

例えば、病気にかかった時には健康の大切さが瞬時に感じられる。時間もそれと同じく、何かがあった時、とくに「間に合わない」と追い込まれると、たとえ零点零二秒さえも余計には得られない。

無常が先に来るかそれとも明日が先か

私たちは「間に合わない」時まで待つ必要はない。その時になってはじめて時間が存在していることに気づいても仕方がないのだ。本号のテーマ報道の中の人物は、時間に対して非常に「敏感」で、几帳面な生活の中においても心穏やかな実践者だ。

慈済慈善事業基金会執行長の顔博文氏は、化学工程を専攻してエンジニアになり、そして有名な半導体企業のCEOになった。また、二〇一七年から非営利組織に転任した。時間管理というテーマについて実務的であり、論理的に順序正しく考えを進めていく。彼は時間を立体的に捉える。長さ、広さ、そして暖かさがあるかのように。さらに「人和、協和、温和」という処世の知恵を有している。

テーマ報道に登場する静思精舎の徳宣

法師は、時間についての解釈をゆったりと説明したが、言葉の意味はとても深い。もしも仏教の考えから見れば、時間は必ず「無常」と繋がっていて、形のある物体や形のない考えも含められ、あらゆる存在は常に移り変わる。人が「無常」の考えを持った時、人生の時間観もそれに影響されていくであろう。

普通の人は「無常」という考えをあまり持っていないので、もっとたくさんの「明日」があるはずと誤解し、娯楽を追い快楽的な暮らしの中で、膨大な時間を浪費している。だから證厳法師は弟子に「いったい無常は先に来るか、それとも明日が先だろうか?」と常に念頭におくべきだとおっしゃっている。

速度でなく、態度の問題

インターネット回線の速度がますます速くなり、新幹線や高速道路などの設備によって、地域間の距離も大幅に短縮されている。データ処理や交通の利便性は昔よりも向上しているはずなのに、なぜ現代人は生きれば生きるほど忙しくなると感じるのか。人々は科学技術の進歩によって、もっと多くの時間を得ている一方、より多くの細かいことに向き合わなければならなくなった。いったい人は時間の支配者なのか。それとも時間の奴隷なのか。

「一年の計は春にあり」と言われる。元旦あるいは旧正月でもいい。年の始めに願かけをしたことは、今どのぐらい実現されただろうか。

上記の質問で、自分の時間に対する態度を点検できるかもしれない。一言でいえば、時間への考え方は、すなわちその人の人生観だ。

慈済ボランティアはいつも「やればさらに得られ、やらなければさらに失う」「忙しい人は良し悪しの淵に引き込まれない。暇な人は楽しくない」「やるしかない」と言っている。それはつまり、このような価値観を反映している。「人生を無駄にしたくない。たとえ忙しくても喜んでする。確実に実行するだけでなく、それは幸福をもたらすことでもある。それに時間を善用してこそ、さらに豊かさが広がる」――。

時間は引いた弓矢のように、飛び出したらもう二度と取り戻せない。時間を善用できる人は、まるで命の長さを延長できるかのようだ。限られた時間を善用すれば、時間は私たちに限りない報いを返してくれるだろう。

顔 博文

心の幅を広げ　生命線を伸ばす

長さ、幅、温度で形作られた時間の哲学。
魂の目でこの世の苦難を見、
有限な時間を無限の空間へと拡張する。

文・李委煌　撮影・黄筱哲　訳・黒川由希

Profile

１９８２年台湾大学化学工学研究所修了
１９８６年UMC（聯華電子）入社
２０１６年「ＳＥＭＩ永続製造リーダーシップアワード」受賞
２０１７年６月ＣＥＯを最後にUMCを退職
２０１７年７月慈済慈善事業基金会ＣＥＯ就任

ハイテク産業のＣＥＯから慈善組織のＣＥＯへ――。半導体大手のＣＥＯであった顔博文は、退職後、慈済基金会の慈善志業へと転身した。今では毎晩十時に就寝し、起床は午前四時。仕事のリズムと献身ぶりは過去のビジネスマン時代をしのぐ。

痩せ型の身体をブルーのジャケットと白いシャツに包んだ顔博文は、慈済基金会ＣＥＯを引き継いで数カ月のうちに五キロほど痩せたと話す。「過労のためではなく、感銘を受けたからなのです」。減量は意識的なものだった。

この一年、頻繁に花蓮の静思精舎を訪れている顔博文は、度々證厳法師と食卓を共にする機会があった。国内外の慈善事業に携わってきた痩身の師匠の食べる量は意外なほど少なく、自分の飲食の量も少し減らさなくては、と感じた。

六十歳を過ぎた彼のＢＭＩと血圧の数値は以前より標準値に近づいた。仕事の時間は長く、休みはほとんど取れないが、体力や精神状態は以前より改善したと彼は感じている。「今の労働は、使命感のある忙しさです。心の状態が全く違います」

有限の時間、無限の精神

過去三十年間、半導体ハイテク産業に従事してきた顔博文は、頭を働かすことが習慣となっている。テレビを見ている時でも情報を収集し、「これが私にとっての休息ですね」と話す。

ＵＭＣの経営陣であったころ、彼はほとんど旅行に出かけることはなく、出国するといっても出張のためであった。二〇一一年、ほとんど欠勤したことのない彼が唯一欠勤したのが、慈済ボランティアとともに東日本大震災津波被災地に見舞金を届けに行った時だった。その数日間は彼にとっての休日だった。

時間の利用と効率にかけては普通の人より優れている、という自負があった。だが、花蓮で法師の日常を目の当たりにして、自分はまだまだ時間を浪費しすぎていると感じるようになった。どんなに「忙しい」と言ったところで、自分にはまだ寛ぐ時間があるが、師匠は年中、いや終生、無休なのだ。「法師は気楽におしゃべりをしているように見える時でも、言葉の端々から世界の慈済の事業について考えていることが見て取れます」。こうして彼は時間をもっと有効に活用することを自分に誓った。

一日二十四時間、秒にすると八万六千四百秒。「でもこれは時間の長さだけを言ったものです」。顔博文は誰もが毎日同じ長さの時間を持つが、しかし法師の時間の「幅」は、他の人とは違って

いると感じている。皆でアメリカ・テキサス州のハリケーン・ハービー災害への援助計画を話し合っている時、法師は同時にメキシコ地震災害調査の進捗状況、アフリカ・シエラレオネ共和国の慈善プロジェクト、タイの水害やフィリピンの台風の現状等にも注意を払い、質問する。彼から見ると、法師の思いやりや関心は、「点」ではなく「面」であるということだ。

顔博文は、時間は「線」ではなく、時間には「長さ」と「幅」があると考えるようになった。「長さと幅を掛け合わせれば、時間の面積は拡張できます」。法師が一日にあんなにも多くの事を処理できるのはこのためだ。そして、法師はそれを数十年繰り返してきたのである。

帯域幅を拡大し、人生をより豊かに

時間が足りないと感じるなら、時間をより有効に活用するほかない。「幅で長さの有限性を補うのです」。時間の幅を広げたいなら、「心を込める」ことがその動力となるかもしれない。

顔博文はインターネットの通信技術を

●顔博文（右）は慈済慈善事業基金会CEOに就任後、毎日様々な会議に出席する。出張の時以外は、昼は花蓮の本部で公務を処理し、夜は職員宿舎へ戻る。

例に挙げる。「帯域幅（band-width）を拡大すれば、同じ時間の長さにおける情報伝達量が増加します」。ハイテク産業でよく話題になる3G、4G、5Gというのは、通信システムの進歩を表す。「後代ほどインターネットの通信速度は加速していますが、それは幅を拡大させたためです。これにより、データのアップロード量、ダウンロード量も大幅に増加しました」と強調する。

この角度から彼の例え話を引き伸ばして考えるならば、視野と心の幅を広げれば、長さには限りある人生を、より広々とした豊かなものにできるということ

だ。「時間を正しい方向に用いれば、多くの人を利することができます」

この時間の「幅」というものから、顔博文は千手千眼観音菩薩を思い浮かべる。一人の人には二つの目しかなくても、五百人集まれば千眼である。「法師は慈悲の心により、その視野が広がり、五百人の目が見るものを一人で見ることができるのです」

八十一歳の證厳法師は、実は自分の視界はぼやけているのだと話す。法師は折に触れてボランティアに「耳で見、目で聞きなさい」と諭すが、それは「心を込める」ということにほかならない。目がどんなによくても、見て見ぬふり、聞いて聞かぬふりをするなら何の意味もない。法師は心の目で感じているからこそ、世界の変化や災難に特に敏感で、それらを憂うのであり、そしてこれこそが「時間の幅の拡張」であると顔博文は考えている。

自分の過去を振り返ると、努力はしてきたが、「家業」と「事業」のためだけに時間を使ってきたのではないかと顔博文は反省する。現在彼にはその二つ以外に、慈善という任務での「志業」も加わった。これは彼の人生の視野を広げたのみならず、時間の幅も広げた。

時間の温度、人を根本とする

ある人が一分一秒を惜しみ、懸命に働いたなら、時間を「効率的」に使ったと言うことはできるかもしれないが、「効果的」に使えたことになるとは限らない。とくに事業の完成と利益獲得のためだけに時間を費やしたなら、その過程で人と人との間の「温度」が失われることになりがちだ。時間には長さ、幅で構成される面積以外に、「温度」の要素も必要であり、これにより時間はより立体的になると顔博文は考えている。

ハイテク業界でＣＥＯを務めている間、多くの決定は「自分の一言で決めていました」と言う。企業は目標の達成が何よりも重要であり、その過程においては「人」ももちろん大事ではあるが、「しかし結局、人と組織は企業の利益獲得という目的のために存在しているのです」と話す。そのため、何事も「その事柄について論じる」だけで、人や感情は決して最優先事項とはならないのだ。企業の経営者にとって最も重要なのは決算報告書の数字であると彼は言い切る。

利益獲得を目的とする企業から、慈済基金会ＣＥＯへと転じた顔博文は、「慈善は人を根本とする」のだと知った。慈

顔CEOの時間管理術

長さ：誰もが等しく1日24時間、計8万6千400秒の時間をもっている。

幅：慈悲の心と無私の心、さらに心を込めることで視野と心の広さを拡大すれば、時間の有限性を補えるだけでなく、より大きな面積を生み出すことができる。

温度：人と人とのコミュニケーションにより互いに成長できる。人とよい縁を結べば、より多くの善事を成し遂げられる。

善の使命は人が成し遂げるものであり、人と人との間のコミュニケーションや、使命を寄せ集めることが相対的に重要であり、また、最も重要であると彼は話す。この「温度」というものは、自分が今最も学ばなければならないものだと彼は自認している。

法師は「人と人とのコミュニケーションと成長」を最も気にかけているようだと顔博文は感じる。物事がうまくいかなかったとしても、また努力すればそれでいいのだ。「しかしおもしろいのは、こうしたやり方により、多くの難しい任務が成し遂げられているということです」。人情や「温度」を重視する思いやりがあったからこそ、法師はボランティアを率いて多くの難しい事業を成し遂げてきたのだと彼は思う。

過去の職場において、自分の能力に自信を持っていた顔博文は、自ら進んで人と付き合うことはなかった。「何事にせよ、自分の力に頼ればいいと思っていたのです」。しかし慈善志業に飛び込んだ彼は、「人とよい縁を結ぶ」ことの重要さを認識した。もちろんそれは目的のための手段というのではなく、多くの人とともに一つのことを成し遂げることの喜びを体得したということだ。

無私の奉仕、無上の喜び

二〇〇六年に慈済ボランティアとなった顔博文は、二〇一七年、六十一歳で慈済慈善志業に転じた後、生活は以前よりも忙しくなったが、時間があっという間に過ぎていくように感じると言う。「喜

び、楽しみ、感動している時、時間が短くなったように感じるものなんですよ」。おそらくそれはいわゆる寝食を忘れ、心から打ち込んでいる時の「忘我」の心境であるのだろう。

物理学者アインシュタインにとって、時間とは直線的なものではなかった。顔博文は、「運動の速度が加速したり、重力場が大きくなった場合、時間は遅くなる」というアインシュタインの相対性理論を例えに出した。実際にこの考えは科学的に証明されているのだ。「苦痛を感じている時に人は時間が過ぎていくのが遅いと感じ、楽しい時には短いと感じるのと同じです」

顔博文はベジタリアンとなって二十年以上、休日には環境保全リサイクル活動に参加する。身体を動かし資源を分類することで、運動と環境保全を両立できると言う。「時は金なり」という考えに基づくなら、ハイテク企業のＣＥＯが資源リサイクルで得られる報酬は、ほとんど時間の無駄のようなものではないだろうか。一度の環境保全活動で集められるペットボトルは約千本、三時間働いても確かに大したお金にはならないと顔博文は言う。「しかしその楽しさは、お金には換えられませんよ」

企業経営のため、職務上の人や物事に対する決定は、必ずしも忠実に自らの心に基づくとは限らない。一方慈善志業において顔博文は、自己の心の声に耳を傾け、やるべきだと決意したことなら万難を排して奉仕するようになった。社会的弱者の団体や家庭の状況が改善したのを目にすると、「その見返りと喜びは、利益獲得の喜びよりはるかに大きいのです」と言う。

様々な業界から集まってきた慈済ボランティアは、「心を込めることこそプロ」という熱意によって公益を成し遂げてきたと彼の目には映る。また彼の「プロ」の定義も彼らによって打ち砕かれた。「たくさんの普通の民衆の大きな願力があんなにも多くのmission impossible（不可能な任務）を成し遂げてきたのです」。自分自身もその中に参加し、ともに使命を達成する中で、彼は感動すると同時に、時間の速さをしみじみと感じた。

彼はまた、證厳法師がなぜ常に「間に合わない」と言うのかも理解できるようになった。今生の時間が長いにせよ、短いにせよ、「人生はマラソンのようなものです。前半ペースが遅くたって構いません。走り続けることが大事なのです」。彼はこう会得した。

（慈済月刊六一七期より）

徳宣 法師

無常を念じ　今に力を尽くす

過ぎた時間は逆戻りできない。
この世は常に無常が伴う。
私たちにできることは
目の前にあるすべての因縁を大事にし
心を込めて仕事をこなすこと。

文・李委煌　撮影・黄筱哲　訳・惟明

Profile

１９８２年より證厳法師の初代随行記者
「慈済月刊」のコラム「随師行記」の主筆
１９８４年２９歳の時、静思精舎にて出家

静思精舎の徳宣法師は證厳法師の二百人あまりいる仏弟子の中で十二番目に剃髪をした弟子である。剃髪する前から上人の側におり、「慈済月刊」のコラム「随師行記」の初代記録係を務めていた。

三十年以上前、花蓮慈済病院の建設期間中、上人は建築専門のボランティアや医療顧問と病院の設計図や医療の将来について話し合うためによく台北に出かけた。会議はよく夜の十一時、十二時まで続いたが、会議が終わった後も、徳宣法師は一人残って、当日の随行日誌をまとめていた。

「専門用語ばかりで私にはほとんど分かりませんでした」。その時、彼女はまだ二十九歳だった。それから七、八年間、彼女は一人で原稿を書いたり写真を撮ったりして、「慈済月刊」の発行に尽力した。「とにかく、やるしかないと思っていました」と話す。出家前の十年間は俗世の浮き沈みの中で心身が疲れ果てたという。心が安らいだのは、休暇に仲間と近くの森や遠くの山を散策するときだけだった。近くの近郊の山はもちろん、遠くは雪霸国立公園や奇萊東山まで行った。

体が疲れても、心の内は自由自在

慈済のボランティアは皆、静思精舎の修行生活は非常に忙しいことを知っている。炊事、客の応対、事務作業、畑、掃除などの務めを交代で担当する。

毎日の時間がいくらあっても足りないようだが、徳宣法師は「規律」を以て精舎の尼僧たちの仕事と休息を形容している。忙しいか否かは気持ち次第だという。問題はこなす業務の量ではなく、「足元がしっかりしているか否か」にあるという。仕事に対する心構えを持ち、習慣を上手く調整できれば、その量が多かれ少なかれ、それによって慌しさを感じるか否かとは別の問題なのだそうだ。「リズムをとらえれば、忙しい、時間が足りない、などとは感じなくなる」

上人の側について勉強し、「足元が変われば、気持ちも変わる。仕事の内容を変えるだけで、気分転換になり、休みになる」という理屈を悟った。

仕事の量を言えば、それは切りのないことだ。五十年近く前の静思精舎は、上人の側に仏弟子が四人、年長者の菩薩が二人いた。昼間の時間はベビーシューズ作りの内職や、田植えなどの仕事をこなし、夜になれば、上人から経典の講義を

徳宣法師の一言

法師曰く「一分一秒を惜しみ、仕事のやり方を変えるとそれが休みになる」。仕事が多く忙しい時ほど、心を落ちつかせなければならない。時間が足りなくても早まってはいけない。心構えと習慣を調整して、今できることを精いっぱいこなせばいいのだ。

受け、放課後も経を読み、暗記しなければならなかった。

あの時代は人手が少ない上に、仕事の量は多かった。「朝ごはんの最後の一口がまだ口の中に残っているうちに、両足はもうすでに田んぼに踏み込んでいたのです」と上人の一番弟子である徳慈法師が皆に話したことがある。単調で厳しい生活だったが、忙しくて充実した毎日だった。徳宣法師は一九八二年、精舎に来た。日誌作成を手伝いながら、時間を見つけて尼僧達と共に畑仕事に参加することもあったそうだ。

そして、五十年後の今の静思精舎には、多くのボランティアと支援者が訪れる。時には千人分以上の食事を用意するが、「いくら忙しくても心は乱れない」と徳宣法師は言う。「今を大切に、できることを精一杯こなせばいいのだ」と。

精舎の法師達が、汗を流して労働する実践力と実務的な知恵を発揮するイメージは鮮明だ。衆生を憐れみ、広く善縁を結ぼうとの寛大な心に根差している。この考えは、慈済ボランティアに伝わっている。慈済ボランティアが社会で慈善活動をし、面倒を恐れずに人々と良い縁を結ぶ大きな原動力となっている。

無常を警戒せよ

ある人が、こう問いました。「上人の職務はとても多いですが、リラックスして休む暇があるのでしょうか？」

「でも私達の目から見て、上人はいつも落ち着いておられるのです」と徳宣法師は言う。上人は常に「もう間に合わない」と言っているにもかかわらず、心が落ち着いているので、忙しくて焦ったり困ったりすることにはならないと、徳宣法師は思っている。

「そのうえ、事の緊急性が増すにつれて、上人の話しぶりが一層ゆっくりになるのです」。悲しい災難に直面している時、上人は優しい口調でゆっくり話すことで聞き手の気持ちを乱さずに落ち着かせるのだと言う。

上人は常に「間に合わない」と感じているが、それは一般の人が「時間が足りない」と嘆くのとは異なっている。一見、両者とも世の中のことで忙しくしているようだが、使った時間の根本的価値は全然違うものだ。

「上人は進行している時間と競走しているのです。それはもっと多くの心を善なる方向に導くための時間を勝ち取りたいと望んでいるからです」と徳宣法師は言う。「仕事の内容を変える」ことを息抜きの時間にするのは、上人が休む間も惜しんでいるからだ。

「人は時間と競走できても、過ぎた時間に対して文句を言うことはできません」。徳宣法師は救難活動を例にあげて話した。「救難の時、少しの遅れは、被災者がお腹を空かしたり、命を落としたりするような結果につながるので、本当に時間との競走です」。慈善のことになれば、確かな計画の上、時間との勝負なのだと強調した。

「一方、自分自身のことについてはあまり計画をしていません。目の前に縁があれば、それをこなしていくだけです」。六十五歳になったばかりの徳宣法師は、シニア割引が使えるようになったが、健康が衰え始めたことで、「時間」の無常を身近に感じるようになったそうだ。

俗世の人々にとって「時は金なり」だが、徳宣法師にとって、時間は夕方の太鼓と朝の鐘の音のように、一種の「警鐘」である。それは、世の中のことは予測しがたく、常に変化していることを人々に知らせようとしているからだ。時間の長さは人生の要ではない。「最も困るのは、次の一刻に何か起きるかを知りえないことなのです」とし、これを無常と言っている。

現代人は自己への投資や将来への計画に関しては得意であるように思われるが、無常に対する観念は欠けている。期待がふくらめば失望も大きい。なぜなら、「当たり前」のような内心の期待と、「現実」という実際の結果とは、必然的な因果関係がないからだ。よって、歩けば歩くほど茫然になったり、頑張れば頑張るほどやる気を失ったりする人々は少なくない。

前の一刻から次の一刻に何が起きるかは予測しがたく、他人の無常を見て、まるで自分に注意を喚起しているように思えると徳宣法師は言う。しかし、これで焦ることはない。命の長短を心配するよりも、心身の健康を上手く管理する方が現実的だ。

着実な生活　心が安らぎ理に適う

普賢菩薩警衆偈曰く、「一日が過ぎ去れば、命は水が少なくなった魚のように、一日分縮む。こう考えると人生は楽しいことがない」。このような考え方は「引き算」で時間を捉えているが、残された命が縮むにつれて知恵の命が成長しているという「足し算」で時間を捉えることもできると徳宣法師は言う。

徳宣法師曰く、出家の前とその後は同じように日々を過ごしているが、慈済に入ってからは時間に対する価値観が変わったと言う。時間を金銭で計るのは所詮意味のないことだ。時間を世の中のために使うなら、一分一秒も大事にしなければならない。「今の私はいつこの世を去ることになっても、心は安らいでおり、悔いはありません」と話す。

尼僧であるかどうかに関係なく、人の命は短く苦しく、残念に思う事柄に満ちている。「だからこそ無常を恒常的に捉え、今生きているこの命を知恵の命に変えるべきなのです」と徳宣法師は話す。命の長さの違いは、各々の因縁が異なっただけだ。「大事なのは自分自身が納得できるような、充実した生き方を目指すことです」と徳宣法師は強調する。

善の扉

「慈済ものがたり」をご自宅までお届けします

各慈済連絡所では無料でお配りしています。（月1回発行。1冊）
ご自宅までお届けする場合の郵送料は年間NT$120。
2冊以上ご希望の方は読者サービスセンターにお電話ください
日本に在住されている方は慈済基金会日本支部にご連絡ください
郵送料のお振込み：台湾郵局口座：19905781　口座名：慈濟傳播人文基金會
読者サービスセンター電話番号：02-28989000内線1165
上記の郵送料は台湾国内に限ります。海外または離島の方は読者サービスセンターにお電話ください。

●インターネットでもご覧いただけます。URL http://web.tzuchiculture.org.tw/index.php?s=7

オンラインでの送付申し込みはこちらへ

百の流れは海へと帰る

有情の世界

◎文・林美容（慈済大学宗教及び人文研究所教授）訳・本諦

我々は有情の世界に対する意識や感情から離れることはできません。しかし、心の動きをたどり、今の状況をじっくりと考えることはできます。良くも悪くも感情により縁が結ばれることから、諸々の執着が生まれ、様々な苦境に陥った時でも、解脱して自由になるにはどうしたらいいかを、少しずつ思い描くことができる可能性を秘めているのです。

人間は生まれてから死ぬまで、感情の世界で自分の存在を体験するのです。俗にいう「三なし女」とは、親なし、夫なし、子供なしの女性のことですが、私は今、母が健在ですし、「何かが欠けている」という感覚はなく、親縁に満たされています。兄弟が多いため、甥や姪が続々と生まれてきて、私のことを「おばさん」と呼ぶ人が増えてきています。

最近実家に電話をし、母の様子を伺いました。弟の娘が電話に出てきて、「伯母さん」と呼んでくれました。幼く可愛い声を聞くと、心に花が咲いたように嬉しくなりました。両親は、毎日お爺さんお婆さんと呼ばれ、さぞ気分がよいことでしょう。

私の母には三人の曾孫がいて、一人はまだ赤ん坊です。子煩悩な母のことですから、心の中は幼い曾孫のことで一杯で、いざその時が来ても、往生できないのではないかと思い、孫離れをしてはどうかと母に薦めてみました。ですが、自分の一生は家庭だけという古い考えを持つ母にとって、それは極めて困難なことだと思いました。その後、本人さえよければそれでよいのだと思い、私は口を挟まなくなりました。

家族の感情は全ての人類の感情関係の中においては、もっとも自然で温かいものだと思います。友情は素晴らしいですが、老いた友や親友、益友は得

難いものです。家族といえどもお金が絡んで感情がこじれることはありますが、ほとんどの人は家庭での家族の感情を温かく感じることができます。

衆生は有情衆生と呼ばれます。衆生は感情のある世界に存在しています。生まれては消える縁の中で、さまざまな感情を体験していくのです。仏陀の解脱と悟りは、このような有情の世界を観察し、その本質を考え、感情という束縛の網から完全に解き放たれたという意識を持つことと、大きく関係していると言えます。

凡人である我々衆生にとって、日常生活の中においてこのような有情世界から離脱することはできませんが、仏陀に習い、自分の今までの心の動きをたどってじっくり考えると、良くも悪くも感情により縁が結ばれることで諸々の執着が生まれ、様々な苦境に陥ったとしても、解脱して自由になるにはどうしたらよいのか、少しずつ思い描くことができます。その可能性が我々衆生にはあるのです。

（慈済月刊六一一期より）

菜芯お婆さんの大願

◎文・葉素滿　訳・心愛

皆は高齢のお婆さんに「リサイクルのことを止めて、自分の身体を大事にしようよ！」と口々に勧めていた。「病気で死ぬより、やれることを死ぬまで続けた方がいいです」とお婆さんは願を打ち明けた。

嘉義県中埔郷にある「田」の字型の別荘のような家に辿り着いた。庭先ではみずみずしい緑の木々や、咲き誇る色とりどりの花が迎えてくれた。高貴な赤いバラの淡い香りが漂い、一株の大輪のハイビスカスが秋風にゆれている。

このような古風な庭作りの主人は、恐らく気品があり素敵な人だろう、と想像しながら進んでゆくと、そこに白髪をショートカットにして満面に笑みをたたえた菩薩のような老婦人が出てきて、親切にボランティアを出迎えてくれた。

目の前の優雅な環境からは資源回収という仕事を想像しがたいが、環境保全の菩薩、羅劉菜芯さんはまちがいなくこの家の主人である。

環境保護に一歩踏み出す

二十八年間環境保全をしてきたベテランの菜芯さんが話してくれた。「当時、鄭富美師姐（シージェー）（師姐は慈済の女性ボランティアの呼称）に誘われてリサイクルを始めたのです。しかし、どこから始めたらよいのか分かりませんでした。それに、世間の目も気になりますからね。実行するのに心の壁を越えなくてはなりませんでした」。心配したのは、町内の知り合いや隣近所の人に見られることだった。

「そこである方法を考えつきました」。菜芯さんはそう言うと、日よけ用の帽子を取り出し、頭にかぶって顔をしっかり覆って二つの目だけを出してみせた。その格好で安心してボランティアに出かけていったのだが、地元ではすぐに見分けられてしまった。

ある人は不思議そうな眼で、「子どもが親不孝で生活にでも困っているのか？」とか「年になっても小遣い銭を稼いでいるのだろう」などと陰で言う人もいた。それで菜芯さんが出かけると、商店街の人々が店先に出てきて注目の的になった。そのように噂を飛ばされていた最中に、お婆さんは思い切って自分に関する噂について、次のように説明した。「私がリサイクルをしていることは確かです。でも、それで得たお金は自分のためではなく、

（撮影／楊孟仁）

證厳法師に困窮者への支援に当ててもらうよう、慈済に寄付しているのです。それに、『資源を回収して地球を護る』と法師に教えられているのです」

昔、ゴミの収集所には廃棄物を収集するためダストボックスが置かれていた。そこで、ダストボックスの中にリサイクル物がたくさんあることを、目の利く菜芯さんは発見した。小柄な菜芯さんは、ダストボックスの中を覗き込んで再利用できる物を掘り出していたが、ちょっとした不注意で中に落ちてしまい、顔が赤く腫れ上がってしまったことがあった。

菜芯さんは家族に本当のことを言えず、「私もよく覚えていないのだけれど、家の中で転倒してしまったのよ」

ある日、近所の人が大量の段ボール箱を燃やそうとしているのを見かけ、物を大切にする菜芯さんは、すぐさまそれを

止めて、段ボール箱を貰い受けた。

泣くに泣けず笑うに笑えず、気にもせず

菜芯さんは台車を押しながら町並みに沿って回収をする。長く続けるうちに商店街の人と気心が知れるようになった。皆が自発的に段ボール箱やボトルや空き缶などを取っておいてくれるので、お婆さんは毎日のように回収しなければならない。また、自宅まで持ってくる近所の人もいる。回収した廃棄物は自宅の車庫で分類している。

しかし、時には資源回収だというのに常識外れの人もいた。汚れた枕や束ごとの箒、それに使用済みのちり紙まで持ってきたので、あきれて泣くに泣けず笑うに笑えず、「我が家をゴミ捨て場とでも思ったのでしょうか。でも、私は気にしません。かえって、自分の悪業が減り、慧命が増すと思いました。また、私が整理した回収物を盗みに来る人もいます。誰がやったかも知っていますよ。でも私は追及するつもりはなく、気にもしないのです」

時間を大切にする菜芯さんは、井戸端会議をしている人々を見かけると、「世間話をするのは悪業が増し、人生が無駄になるので、むしろ念仏やリサイクルをした方がましですよ」と話す。

すでに十数年前に菩薩戒（大乗仏教の戒律）を受持したお婆さんは、ひたすら極楽往生の強い想いを込めて、毎日「阿弥陀仏」の四文字を七時間も唱え続けているそうだ。

「私は死後西方浄土へいくことを切に願っているので、朝の勤行に念仏を唱えます。午後回収と分類が終わると、仏堂で念仏を唱えながら繞仏を（阿弥陀仏を唱えながら仏堂内をぐるぐると歩くこと）二十一周していました」。信仰心の篤い菜芯さんは、「念仏を唱えるとき、海青（仏教徒が法事を行う際に羽織る黒い袈裟）を羽織らないと、念仏を唱えても意味がありません」と言う。

甘んじて尽くし、喜んで受ける

八十八歳の菜芯さんが育てた三人の子どもはみんな立派に成長した。今は末っ子と一緒に住んでいる。今までの自分の人生について語ると、「大変な苦労をしてきましたが今は幸せですよ」と言って彼女は幸せそうな笑顔になった。

「昔は経済的に苦労した時期がありました。お米を買おうとしましたがツケ払いをさせてもらえず、すでに手にしたお米を店の人に奪い返されました。また、子どもの学費を払うお金がなかったの

で、『女の子は、いずれ嫁に行くのだから学校には行かなくてもいい』と冗談を言った人もありましたよ」

「家計が苦しい時期、私はそんなつらさを経験することで自分の悪業が軽くなると前向きに考えました。以前健康診断で血糖値が高いと言われましたが、リサイクルを楽しくしているおかげで今はもう大丈夫ですよ。子どもは私のことを大事にしてくれます。出かけるとき末っ子はいつも私と手をつなぐので、とても嬉しく幸せだと思っています」

「念仏の際に、いつも仏様に『どうか私が病気もせず、災難にも遭いませんように、そして死の間際までリサイクルをやり続けられますように』と祈願していました。まあ、家族の迷惑にならないように、できれば私がこの世を去ってから身内に知らせてくれればいいですね。みんなの時間が無駄にならなくて済みますから」。菜芯さんはそう願っているそうだ。

すでに高齢の菜芯さんに、「リサイクルを止めて、自分の体を大事にした方がいい」と、皆が口々に勧めていた。でも、「病気で死ぬより、やれることを死ぬまで続けた方がマシです」と、智慧のある菜芯さんは願を打ち明けた。

腰にサポーターをつけていたが、関節は老化が進んでいたため、時々しくしくと痛みを感じる。でも、お婆さんは、「この痛みで自分の悪業が軽くなるのよ！」と強い意志をこめた瞳で再び前向きになった。

菜芯お婆さんは、ゆうゆうと晩年を過ごせるはずなのに、数十年間を一日の如く、資源回収の道を貫いてきた。月日の経つにつれて、お婆さんは、自分がまだリサイクルをやり続けられる幸せを大事にして、今日も回収台車を押しながら大通りや路地を通り抜けている。

（慈済月刊六一五期より）

●お婆さんは台車を押しながら町並みに沿って廃棄物を回収する。商店街の人が段ボール箱やボトルや空き缶などを取っておいてくれるので、お婆さんは毎日回収しなければならない。（撮影／郭富美）

◎文・李秋月（慈済教師懇親会ボランティア）絵・林家陞　訳・閻麗妮

こう話せば子供に気持ちが伝わる

問：愛が深ければ期待も大きいという言葉がありますが、逆効果になることもよくあります。どうすれば親や先生たちの気持ちが子どもに伝わるのでしょうか。

答え：證厳法師がおっしゃった「愛が深ければ深いほど、教えることが大切になる」という言葉を聴いて、私は慈済に加入しました。そして自己を反省し、我が子と学校の教え子にどんな良い言葉や、ユーモア溢れる言葉を使えば良いかと考え始めました。

「いい言葉を聞くと冬にでも温かく感じ、逆に悪い言葉は人を傷つけ、六月でも寒さを感じさせる」と言う諺のように、自分の気持ちをいかに表現すれば子供に伝わり理解してもらえるでしょうか。コミュニケーションスキルをどのように磨けば、この気持ちを子供にわかってもらえるのでしょうか。

「一言の励み」という本の中にこんな話が書かれています。米国の著名な演説家カーネギーは小さい頃非常にわんぱくな子でした。九歳の時、父親が再婚して継母を連れてきました。父親は新しい妻にこう言ってカーネギーを紹介したのです。「この子はこの町一番のわんぱく坊主だから気をつけてくれ」

しかし意外なことに継母はカーネギーに近づいて両手で彼の顔を包み込んで見つめながら夫に言いました。「この子はいたずらっ子ではありませんよ。頭が一番いい子なのです。ただその情熱をどこに注いだら良いかがまだわからないだけなのです」

この言葉にカーネギーは感動して、心が温まり、目が潤みました。その後、カーネギーはもういたずらをやめて、コミュニケーションスキルを高めるため真剣に勉強しました。

カーネギーのお父さんは、言葉が石や

ナイフのように鋭くとがっていましたが、継母は花や風のように穏やかな言葉で人を喜ばせました。

言葉を口にするとき、自分の気持ちが穏やかでないと相手に喜んで聞いてもらうことはできません。その上誤解を招く可能性もあります。もし愉快な会話ができ、楽しい雰囲気になれば、コミュニケーションがスムーズに進み、良い結果になると思います。

子供と大事な話をする必要がある時、誤解や理性のない言葉を用いるのを避けるため、私はよく手紙を書くことにしています。その手紙の初めに必ず書くのはいい言葉で愉快な雰囲気を醸し出すことができますし、聞いている人も発する人も楽しいし、作り出したエネルギーはプラス的で、強大な力になります。結果的にそれは利己的だけでなく利他的な行動とも言えるでしょう。

それゆえ、教師たるもの常に自分の言葉は人を喜ばせたか、励みになったかと反省する必要がありますし、その言葉で相手を褒めたり、認めてあげたりできたかどうかを考えるべきです。そうしなければ、子供たちと今生に結んだ良縁を逆に壊してしまうかもしれません。

（慈済月刊六一三期より）

子供を褒める言葉です。そのあとはその子に伝えたいポイントです。このようにして、伝えたい思いが伝わるように、そして、その子を傷つけないように注意していました。

手紙が面倒だと思う人もいるかもしれませんが、教育という道は長いですから、後悔のないように、私たちはもっと工夫を凝らしていかなければなりません。そしてそれは子供のためにも、自分のためにもなると思います。

「口を慎む」「口業を作るな」ということはよく知られていますが、もっと重要なのは、「いい言葉を発する」ことです。

子供に話すとき、喜ばせたり励みになる言葉で相手を褒め、認めてあげるといいでしょう。ユーモアに溢れる良い言葉を使いましょう。

山奥の私塾（上）

懐徳居木工実験学校

都会の喧騒を離れ、山林の中に佇む木工学校を訪れた。ここ懐徳居は、創設者林東陽氏と木工教師たちの夢の結晶である。木工技術指導を行うばかりでなく、デンマーク家具の手作りの精神も伝承している。より多くの人々に手作りの家具の美しさを知ってもらいたいと願っている。

文・葉奕緯（「経典雑誌」記者）　訳・青木芳味　撮影・安培淂（「経典雑誌」撮影主査）

「天に時あり、地に気あり、材に美あり、工に巧あり。これら四つが合わされば、それは必ず良いものとなる」『周礼冬官考工記』

「材美工巧」、これは台湾人が家具を選ぶ際の重要なポイントである。材質だけでなく、製造の技術にも非常にこだわるのだ。かつて木工家具職人にとって、木工を学ぶことは手に職をつけ家族を養っていくための手段だった。しかし、今日の台湾では木工学習が一つの余暇活動となっており、学習者の数はしだいに増え続けている。

二〇〇六年、定年退職した元教授、林東陽氏が台湾で初めての木工学校「懐徳居」を設立した。木工職人の卵を数多く育成するばかりでなく、新しい時代における木工業に対する人々の認識を塗り変えている。

真昼になると、建物の外は灼熱の暑さに包まれる。しかし、山奥にあるこの学校には冷房がない。教室の両側の窓を開けて扇風機を回し風通りをよくするだけで、この山小屋は十分涼しくなるのである。前と後ろにある透明の窓ガラスからは遠くの木々を眺めることができ、八十坪の校内は木の香りで満ちている。生徒は

ドイツULMIA社の作業台の前に立って木を削り、教員はその傍らで機具の使い方を教えながら生徒の質問に答える。

生徒の中には、ベルギーから来た台湾人とのハーフの金髪の高校生もいれば、香港からワークエクスチェンジのために台湾へやって来た若い女の子もおり、ほかにも髪の真っ白な老紳士やカメラマン、デザインを専攻している大学生や働く女性など、職業は様々である。

懐徳居の教員三名は皆「天主教私立公東高級工業職業学校」（公東高工）で厳

●作業台の上にノミをずらりと並べ、建築学科卒の黄凱祺が家具の組み立てを行っている。

しい木工訓練を受けたあと、台北工業専科学校に進学し、林東陽氏の教え子となっている。

「目の前にあるレンガ造りの壁やブラインド、鉄骨構造の建物は、以前大学院の学生だった黄燦陽君と私が設計し、森平房先生とその作業グループがつくったものです。ここはかつて豚小屋で、庭木が植えられていた面影はありません。当時、私が木工学校を建てようとしているという話を聞くと、皆全力で助けてくれましたが、本当に実現すると信じていた人はほんの一握りでした」。今年七十歳になる林東陽氏は、建物の外観を紹介しながら私を案内するうちに、彼と懐徳居の物語を語り始めた。

●長年在籍している呉宜紋の新作――ビスケットスツール。彼女はたびたび古い木材を用いて創作し、エコの概念を推し進めている。（懐徳居提供）

体制から離れた林東陽氏

「まずやってみる」「誰もやらないなら自分がやる」――。これは林東陽氏がいつも口にしているモットーで、ここにも勇敢にチャレンジし困難に立ち向かっていく彼の人柄が現れている。

林氏が高校生だったころはまだ戒厳令が敷かれており、当時の人々の言論は決して自由ではなかった。学校新聞も、毎年決まった形式で出版されているサークルの刊行物も、単なる形式的なものに過ぎないと感じた彼は、志と信念を同じくする学友たちを集め、それまで見たこともない「青年の心の声社」という出版社を申請し、『附中学生の心の声』という月刊誌を自費出版して学友たちの心の声を代弁した。

その後、林東陽氏は人生の大半を他の地で過ごすことになる。十歳の時に家を離れて他郷で学び、中興大学の森林学部に進学した。その後公費でアメリカへ渡り、ノースカロライナ州立大学で「家具製造と経営学課程」を学び、世界を一周しながら少なくとも八回の引越しを経験した彼は、最終的に台北工業専科学校の工業デザイン学科家具コースの教職に就く。だが、彼の溢れんばかりの情熱は、

体制に縛られた教育のあり方によって冷や水を浴びせられる。

林氏はまず初めに、学校の融通の利かない単位制度によって、学生一人ひとりの負担が重くなりすぎていることに気がついた。海外の大学院では一学期に二、三科目でもすでにやりきれないほどの宿題があるのに、国内の大学では一学期になんと七、八科目もあるのだ。これは間接的に学生たちのいい加減な作業を促すことにつながり、学生はいつも適当に宿題をこなすという有様だった。

大学にいた時の林氏はとても厳しいことで有名だった。授業が始まって十分以上経っても教室に入って来ない場合は、ドアに鍵をかけて締め出すというルールを設けたばかりでなく、学生を落とす先生の一人としても学生たちに恐れられていた。しかし、彼は当時全校で唯一、たびたび街に出て環境保全活動に参加する教師でもあり、授業の時に班長が「起立、礼、着席」の号令をかけるという学校のルールを嫌う教師でもあった。彼は学生たちに「卒業した後、道でばったり私に会ったときに、きちんと私に挨拶できることの方が、こうした形式的な挨拶よりもよっぽど重要だ」と話す。

ある日学校に、公東高級工業職業学校を卒業した入学試験免除の推薦入学生、森平房氏がやってきた。彼は国際技能競技大会の家具木工職部門で金メダルを獲得した選手で、しっかりとした木工技術を持っていた。

「公東高級工業学校の教員には私の古くからの知り合いがたくさんいます。彼らはこの推薦入学生が、実技は強いが学科が弱いことを心配していて、私に彼の学習状況にとくに気をつけてやってほしいというのです」と林東陽氏は語る。

「案の定、森平房君はふだんテストの

●女子大生の仇瓊萱が万力を使って材料を作業台の上に固定している。

●教員の森平房氏は学生たちを糸鋸盤の周りに集め、操作中によく起こる問題について説明した後、学生を指名して実際に操作してもらう。

成績がよくありませんでした。しかしこんな優れた木工の人材がテストの成績のために退学になるのは惜しいと思ったので、私は特別に『森平房に関する規定』を設定し、期末試験は筆記試験か実技試験を自由に選んで受けられるようにしました。そうして彼は単位をとることができたのです。もしあの時彼を助けようとする人がいなかったら、彼は学習の機会を失っていたことでしょう」と林氏は語る。

台湾初の木工学校を設立

林東陽氏は五十六歳になった年に学校の体制に嫌気が差し、早期退職を決意した。

この時彼は、彼が所蔵する中国語と外国語の家具関連図書千冊近くと九十点の家具模型を学校に寄贈しようとしたが、学校側はそれを婉曲に断った。林氏は驚いたが、それらのものが捨て置かれるのも惜しいと思い、翌二〇〇四年、林口の実家に「家具知識館」を設立し、そこに展示して人々に見てもらえるようにした。また、ブログも開設して自身の思いを綴っている。

「元文化建設委員会主任委員の陳郁秀氏は、当時家具知識館の開幕式に参加して私を見るなり言いました。こんなに充実した所蔵品は国家デザインセンターが管理するべきだと」。林東陽氏は笑ってこう続けた。「しかも家具知識館が開館して一番最初に本を借りに来たのは、なんとフランス人だったのです。その後、彼は私たちの建てた木工学校にも来て授業を受けました」

一年経って、ちょうど家具知識館の一周年記念の時、家族や友人が百人ほど集まって祝賀会を開いていると、林東陽氏はその席で幾人もの人からこう尋ねられ

香りを放つ木製の家具

●小さな戸棚の縁が持ち上がっているのは、上に載せたものが滑り落ちないようにするため。サイドテーブルとして使用できる。

●人形はアート作品。胴体部分のオルゴールから彼女の思い出のメロディーが流れ出す。

●ティーテーブル。三点一組のテーブルセット。使用しないときは一つにまとめておくことができる。

●組子ミニチェスト。小物の収納に使う。右側に日本の組子装飾を用いている。

（家具写真・懐徳居提供）

●学生がノミを使ってパーツの細部を整えている。

た。「以前ブログの中でおっしゃっていた森林教室を建てたいという夢はいつ実現しそうですか？」。そこで、林氏は会場に集まっている参加者に「木工制作を学びたいという方がいらっしゃったら手を挙げてください。年寄りをからかわないでくださいよ！」と声をかけ、その場で調査を行った。すると、なんと十数人もの人が手を挙げて申し込みをしたのである。

林東陽氏は木工仲間たちの熱意に驚きながらも、心を落ち着かせて彼らに言った。「日を改めて詳しい内容を話し合いましょう」と。これはきっと彼らの一時的な衝動だろうと思ったのだ。ところが次に彼らに会った時、林氏が彼らにその場で五千四百元の頭金を支払うことを求めると、なんと彼ら全員がそれに応じた。林氏はこの時初めて、彼らは本当に木工をやりたいのだと知ったのである。

数日後、彼はできればコストと同じ値段で木工機械を売ってもらいたいと願い、長年一緒に仕事をしている彼の教え子、林彦志氏（現在懐徳居の教員）と共に豊原の木工機械メーカーの社長を数人訪ねた。すると驚いたことに、林東陽氏の学校設立の構想を聞いた社長たちは皆林氏を支持して機械の寄贈を申し出、最終的には様々な機種が十五ものメーカーから寄贈されたのである。

続いて彼は森平房氏に電話をし、学校の工事について話し合った。森平房氏は卒業後も林氏と頻繁に連絡を取っており、すぐに協力を引き受けた。

各界の助けに感謝を表すため、林東陽氏は学校の経営が軌道に乗ると社会への還元を始めた。彼は家具デザイナー志望の大学生を応援するため、二〇〇八年に「懐徳居文化基金会」を設立してデザイン学科の優秀な木工作品を選び、初期には「家具創作新人賞」を授与した。現在は「木工学習賞」を授与しており、毎年学習熱心な学生を五、六人選び、授業料の減免を通して彼らに懐徳居での学習を奨励している。体制にとらわれない教育は大学よりも柔軟性がある。「やっと新しい教育実験を試みることができる」と林東陽氏は笑いながら語る。

林東陽氏は、「学校の創設は人生における偶然であり、歴史における必然である」と考える。二〇一五年、日本「秋山木工学校」の創設者、秋山利輝氏は、台湾にも木工のために設立された学校があることを知って感動し、林東陽氏に「天命に生きる」という言葉を贈った。

（経典雑誌二三〇期より）

【證厳法師のお諭し】

仏法は永久（とこしえ）にこの世に存在する

◎訳・慈願　絵・林淑女

常に道理があるとこの世に希望をもつ仏の智慧を用いてみよう、
仏寿と同じく私たちの生活の中に存続する智慧を
そして人と付き合う時には、菩薩と共にいるかのように
感謝し、尊重し、愛を忘れずに

二〇〇八年五月、大型サイクロン・ナルギズがミャンマー南部のイラワジデルタを襲い、良田は重大な水害を被りました。その当時、現地に慈済人は一人もいなかったため、近くのマレーシア支部の慈済人が駆けつけて、支援を行いました。それ以後、ボランティアとしての責任を担い続け、十年が経ちました。

農民の生活は元より苦しいものですが、重大な損失を被った彼らが最も必要としていた物は種籾でした。以前は、種籾を借りて植え、収穫した後に借りた籾を返済しなければならなかったので、いつまでたっても豊かになることはできなかったのです。風災後の数年は、慈済人が毎年続けて種籾を贈ったため、農

民たちは悪循環の貧しい生活から抜け出すことができました。

農民たちは、初期の慈済人が一日に五銭ずつ貯金していた「竹筒歳月」の話を聞き、「一粒も俵になり一滴の水も大河になる」という精神を知りました。毎日野菜を買うお金の中から五銭ずつ貯金して集めたお金が、今日には、世界中の困っている人たちの支援に役立てられているのです。農民たちはお金を献金する余裕はありませんが、毎日お米を洗う前に一握りの米を甕の中に蓄え、いっぱいになると困っている人に分ける「米貯金」をしています。

慈済が種籾を贈ったタイツ（Taikkyi）鎮スイナクン（Shwe Na Gwin）村は、二〇一五年から現在までに九つの村で三百世帯が「米貯金」に参加しています。毎月集められた米は四十世帯以上の貧困家庭を助けています。

スピンクン（Sit Bin Khwin）村の農夫ウメンヤ（Ūmya Aye）は、二〇一〇年に慈済の種籾を貰って以来、夫婦で毎日五十ミャンマー・チャットの（一ミャンマー・チャットは約〇・〇八円）貯金を始めて、五、六年後に慈済が村へ来た時、一枚一枚きれいに束ねて献金し、彼らの念願を果たしました。

彼らは、善事を発心したからには、この数年はたとえどんな苦労があっても、このお金を使うわけにはいきませんと言いました。雨季の湿った時は紙幣にアイロンをかけ、太陽が出ると干してきれいにしていました。

「人を救うためのお金は菩薩銭ですから使えません」と言いました。こんな清らかな心はいつまでも変わりません。「深い信解、清らかで実直」。この志を尊重して、私たちは見習わなければなりません。

善行は金持ちだけの特権ではなく、心ある人なら誰でも行うことができます。農民たちの生活は貧しくても心霊は豊かで、五十元であれ、一握りの米であれ、日々途切れたことがありませんでした。この人たちの心に雑念はなく、一点一滴集まった善念が積み重なると、人を助けることができるのです。

貪念があっても、お米をどんなに多く持っていても、喜捨をしなくても、同じように一日は過ぎます。善事を行う時は、堅い心さえあれば何の困難もありません。その心をもった三百世帯の人たちが四十世帯を援助しました。これが本当の善というものです。

この善の念願は、「六度万行」となり、

果てしなく広がっています。天と地の間にいる人間は小さいですが、人間がもつ愛の心は世界中に達することができます。

慈善は物資を供応するだけでなくさらに心霊を安定させ善良に向かって導く

報道によると、スウェーデンではこの数年の間に多くの国の難民を受け入れていますが、その中の数百人の児童は「救生放棄症候群」にかかっています。何か病気をもっているのではなく、ただ長時間の睡眠に陥っているだけで、専門家の研究によると、避難する中で受けた苦痛が心を傷つけ、目覚めることを拒否しているのかもしれないと言っています。

気候や災難は苦しいものですが、人による禍の災難はそれ以上です。近年来シリアの戦火は収まる気配がなく、互いの衝突は化学兵器による攻撃にまでエスカレートして、罪のない人民の悲しい悲鳴があちこちで聞かれています。難民の数は増えるばかりで、今度はどこへ行けばいいのでしょうか。

難民は家族と共に異国へ落ちのびる時、パスポートの問題など数々の困難のため、数年経っても故郷に戻れません。長旅と気候の変化、人から受ける冷たい仕打ち、あるいは支援を、子供たちはどのように感じているのでしょうか。

慈済は長年にわたってヨルダン、トルコ、マレーシアの難民やサルビアにとどまっている難民に食事や防寒着を提供しています。言葉が通じなくても、身振り手振りと優しい表情で、ボランティアたちは心からの関心を示しています。

難民の生活ケアの中でとくに医療と教育の負担は重いのですが、これを放棄することはできません。トルコでは毎月定期的に六千世帯への物資配付に加え、三千人の子供たちの学業が中断されないように、四カ所で難民学校の援助を行っています。ボランティアは子供たちの心理状態を気にかけています。教育によって心が健康になり、世の事に関心を持ってすべてを善く解釈し、感謝して足るを知り、そして環境の変化による恨みや対立が社会の動乱の元にならないように願っています。

子供たちでさえも「竹筒歳月」にな

らって、日頃から善事のために小銭を貯金しています。台湾の台南震災、花蓮震災、米国のハリケーンハービー災害の時、子供たちは支援を呼びかけ、自分たちの竹筒貯金箱を持ってきてくれました。

すべての苦難は、人の欲念によって天地の安寧を脅かしています。慈済が難民に寄り添う時に最も大切に考えていることは、その人たちの心が安らかになるようにということです。慈善は物資の提供だけでなく、被災者の痛んだ心を善良に導くために、誠と尊重の態度を以て接し、そしてその心に愛が開花するように導くことにあるのです。

菩薩の道場は遍く天の下にある
あらゆる場所を「救う所、護る所、拠り所」と見なす

今年の正月に六カ国の慈済人がオランダに集まって、昨年森林火災で被害を受けた住民に購買券と毛布を贈って、健康診断を行いました。その中で人医会の医師は、虚ろな目をした元気のない七十歳くらいのおばあさんを診察しました。医師は自分の手を優しくおばあさんの膝にのせて、その顔を見ながら語りかけました。

そして「安」の字が書いてあるストラップを見せながらおばあさんに言いました。おばあさんの気持ちはよく分かりますよ、さぞかし驚いたでしょう、でも危険は過ぎましたから今は無事ですよと慰めると、血圧は徐々に下がりました。

おばあさんの目つきは変わってきて笑顔を浮かべ、医師の手を握り返しました。おばさんは薬も飲まずに元気を取り戻し、最も良い薬は有名な製薬会社の薬ではなく、真実の愛であることを医師はしみじみと感じました。

この時以来、ヨーロッパ、米国などのボランティアはポルトガル森林火災の被災者の苦しみを見るに忍びず、需要に応え、愛を以て随所で苦労を厭わず被災地をたびたび訪れ、被災者に寄り添い慰め、配付を行っていました。

《無量義経》の菩薩道の教えの中に「諸々の衆生は請われなくてもその師となる」とあります。それは「人の傷を

見て我痛み、人の苦を見て我悲しむ」ということです。種々の困難を克服してでも、自発的に奉仕しなければなりません。

昨年十月、米国のサンタローサでカルフォルニア史上最大の森林火災が発生し、八千世帯が全焼しました。猛烈な火の勢いに近づくこともできず、ボランティアたちははやる心を抑えて、火の勢が弱まるのを辛抱強く待っていました。火の勢いが収まり、現地へ行けるようになってからの六カ月間は、被災者への寄り添いやケアサポートを続けました。千世帯の配付を終えた後も、この寒空のもとにもともと生活が苦しい人たちや、家をなくして車上生活をしている人たちを探しました。車のある人はまだいいのですが、車のない人は避難所に入れたとしても、期限がくれば出て行かなければなりません。

家族を連れてどこへ行けばいいのかと、露頭に迷う人たちの苦しみを見たボランティアは、彼らのために家を探しました。現地の非政府組織と政府機関は、慈済人が苦難の人たちのために奔走していることを見て、協力を申し出てくれました。苦難の人々が一縷の希望を見出した時に、北カルフォルニア支部執行長の謝明晋は、自分が宝蔵を探し得たように喜んだと言いました。ボランティアたちは「無縁大慈、同体大悲」の大義の下に、菩薩の方向に向かって突き進みました。愛の力による共知、共識、共行がすなわち菩薩の赴く所なのです。

仏陀の教育とは、身体力行し精魂こめた愛の奉仕を以て、衆生を苦難から開放することです。衆生が安楽を得た時が人間菩薩（じんかん）が最も嬉しく感じ満足する時です。

時は飛ぶように過ぎ去る
凡夫はその地にとどまらずに
生命の指針に向かって確実に精進すること

人の世の成住壊空、生老病死は日時と共に過ぎ去ります。年齢、体格、記憶は自分の思い通りになりません。しかし自分の年齢を数えるのではなく、精神能力を発揮して常に精進することが最も現実的です。

法を心に受けて日常生活に応用し、普遍的に群衆の中で互いに触れ合い、互いに教え合って、人々に生命の価値を了解させるのです。時を無駄にせず、衆生に利益して善縁を結ぶこと、他人に利益するとは言うものの、その実善念を発心することは、真っ先に自分に利益することになります。身体を以て勤め励むと、さらに来世の功徳の糧を積むことになるのです。

二千五百年前に、仏陀が霊鷲山で説かれた《法華経》は、形のある人の世では隔りがあるが、無形の心に距離はなく、もしも仏の知見を悟ることができると、その一刻が仏の説法されている時だという教えです。衆生がどれだけこの道理を了解したかが、仏寿の長さになります。常に道理があると人には希望があります。

仏の智慧は永久に世間に留まっていますから、仏の智慧を受けてそれを用いると、仏の寿命と同じように私たちの生活の中に生きてきます。心霊の道場はいつ何時も荘厳です。人と親しくし、感謝、尊重、愛が周囲にあるならば、全てが菩薩です。

日々法の流れの中で沐浴を受けるには、感謝し足るを知ることが必要です。

この広い社会のこれほど多くの衆生の中で、因縁を得るのは困難なことですが、師と共に共同の善知識、六度万行に投入して、さらに大切な包容が必要となります。

日々この菩薩道の中で、ある人は早く到着し、ある人は早く歩きます。比較的遅く着いた人、または現地の風景の中をあちこち見回っている人もいます。しかし、お互いに励まし合い、一分一秒も無駄にせず、丁寧に過ごすことです。お互い手に手をとって一緒に精進の道へと邁進しましょう。

一生の中で今のこの一秒は重複することはなく、生命も流れるまま待ってはくれません。

もしも煩悩や無明に固執して、停頓していたら、世間の濁気に染まったままでしょう。しかし、いくら憂いても仕方がありません。ただちに「法を受持して、正教を弘め」、何秒間があれば、その何秒間で責任を果たすことです。刹那を把握することとは、永劫に生命の指南針に向かって的確に誠実精進することです。

皆さん、心して取り組んでまいりましょう。

（慈済月刊六一八期より）

慈済国際・ポルトガル

ポルトガル森林火災

◎文・王以潔（イギリス）　撮影・王素真　訳・本諦

ポルトガルの領土の三割は森で、しばしば火災に襲われる。二〇一七年六月と十月に、高温と強風の相互効果によって森林火災が起き、台北市十九個分の面積を焼き尽くした。その中には国家保護の対象で七百年以上の樹齢を持つ林も含まれ、ポルトガルでは今までで最も厳しい天災となった。

ポルトガルはヨーロッパの南部に位置し、北大西洋に面している。スペインに隣接し、海を隔ててアフリカのモロッコにも近い。気候は温暖で、人々の心も温かい。

十五、十六世紀のポルトガルには多くの航海冒険家が現れた。外へ領地を広げようとして海上の強国となったが、現代のポルトガルの街を歩くと、南ヨーロッパ特有のゆったりとした雰囲気を感じる。しかし、災難の観察や救援に関しては、このようなゆるやかなテンポでは焦りを感じざるを得ない。

二〇一七年、ポルトガルは二回の森林火災に襲われた。場所は首都リスボンから車で三時間半の距離の中部地区であ

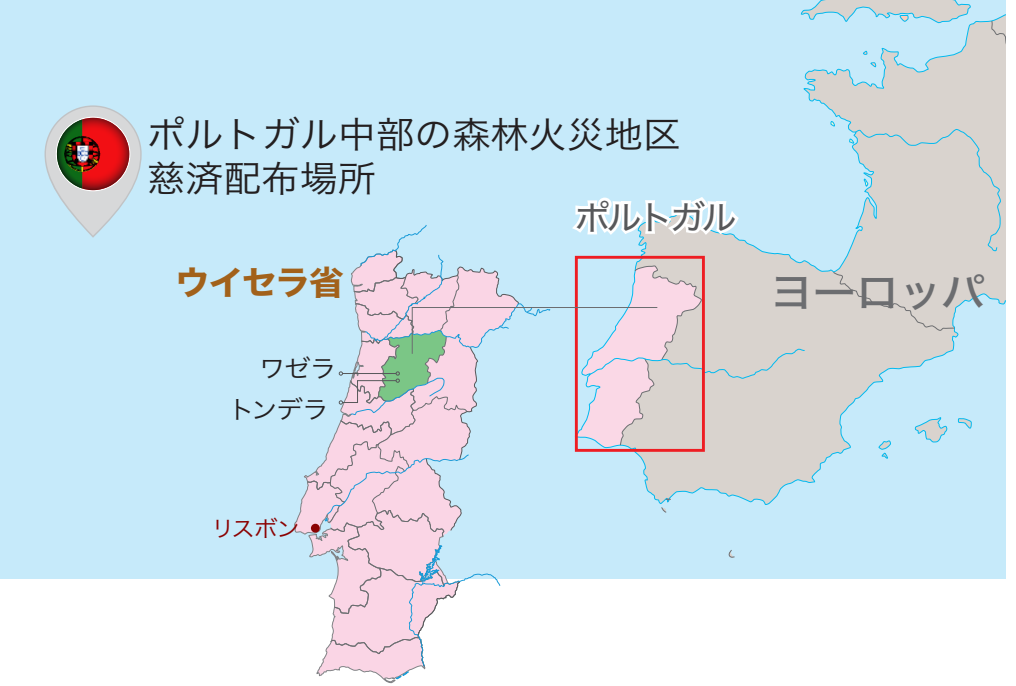
●ポルトガル中部のビセル省にあるワゼラ市は２００００人の人口を有する。森の火災で１５０軒以上の農家が被害を蒙り、総額約８００万ユーロの損失を受けた。

る。一回目は六月で、二回目は十月だった。焼き尽された面積は五十二万ヘクタールで、台北市の十九個分に相当する。それにより一千五百世帯が損害を受けた。十月の森林大火は、ポルトガルの外海を通過する台風に出会い、強風に巻き込まれた炎がすばやく蔓延し、収拾のつかない事態となった。

二〇一七年十月、私はイギリスのニュースでポルトガルの森林大火の報道を見て、焦りと悲しみの気持ちで一杯だった。言葉が通じないし、現地に慈済のメンバーがいなかったため、ただ関心を持ち続けることしかできなかった。十一月に台湾に戻った後、ドイツに住む林美鳳師姐とこのことを話したところ、リスボン在住の友人で弁護士でもあるペトロ・ピント・ドアルトさんに協力してもらえるかもしれないことを知った。

それからポルトガルの国会議員であるペドロ・アルベスさんがポルトガル駐在の台北経済文化センターに助けを求め、王楽生さんが代表として慈済基金会に二度も救援の要請の手紙を届けたことを知った。

慈済の調査チームは十一月二十七日の出発を予定していたが、ポルトガルの連休にぶつかった。それに政府からの回答



はかなり時間がかかっており、スケジュールを立てるには難しかった。それでも皆が焦りの気持ちを抑え、誠心誠意話し合いを続けた。そしてついに台北経済文化センターやペトロ弁護士などのたゆまぬ努力のもとに、支援団は十二月五日にポルトガルに到着することができた。

ポルトガルには三大発展委員会があり、ヨーロッパ連合からポルトガルを援助する資金を管理している。その中にあって火災の再建経費については中部発展委員会（Centro Regional Coordination and Development Commission）が統一管理していた。被災した家庭ごとに五千ユ

ーロを援助したほか、その費用は地方再建に使われることになった。

我々は中部発展委員会の主席であるアンナさんを訪ね、ポルトガル駐在台北代表センターのメンバーにも同伴してもらい、被害地区であるトンデラとワゼラの二つの市の団体と会見した。

大火から二カ月余りが過ぎた頃、我々は被害が最も厳しい村を訪ねた。沿路に黒く焦げた樹木や土地、屋敷を目にした。市は屋敷が全焼した民衆を安置したが、再建の道はまだほど遠かった。

五日間の被災観察を通じて、被害を受けた家庭のメンバーの年齢はやや高く、生計を頼りにした農場から農具や穀倉、家畜などは完全に焼け尽されたことが分かった。今年の二月二十四日、二十五日の二日間で、七カ国から六十八名のボランティアが二つの都市で三回の物資配付を行った。合わせて四百九十一世帯に民生用品と農業道具を購入できる購買券、山の防寒に適した慈済リサイクルマフラーが配付された。

慈済国際・ポルトガル

疑いのない愛

地球の反対側にいる人たちがポルトガルの山の上にあるひなびた村へ来たのはなぜだろう?と疑問に思っていたが、配付の会場でその答えを見つけた。

◎訳・慈願

撮影・王素真

文・林美鳳（ドイツ）

●ワゼラ市のカンピア学校の運動場で配付式典が行われ、ボランティア全員が被災者に敬意を表していた。

タンテラ市は、慈済がポルトガル森林大火の後に支援配付を行った地域の一つである。タンテラ市政府の幕僚長ミックル・トーレスは被災地の処理と復興事業の責任者である。

「トーレス」はポルトガル語で高い塔という意味が込められていると聞いていた。配付の準備をしている時、私たちはその高い塔の外に取り残されたような気がしていた。それに、言葉が通じず意思の疎通が困難で、前回、昨年十二月に支援チームがタンテラ市を訪問した時には予想もしなかった情景だった。

今回は五大陸にまたがる地域からボランティアが集まって行われた配付活動であり、言語や文化的背景、時差、さらに考え方の相違による困難があった。そのために、私たちは当初タンテラ市で配付活動を行うことに一抹の不安を覚えていた。意思の疎通に時間を費やし、購買券の契約調印に至り、配付券、案内状などが印刷され受け取ることができるようになると、高い塔の門も少しずつ開かれ、最後の数日には準備が予定通りに整った。

一日目はワーツーラ市で配付を行い、二日目にタンテラ市へ行った。この時、ボランティアたちは暗黙のうちに自分たちの配置を守って活動したため、共同作業がスムースにはかどった。そのような互いにいたわり合う雰囲気に住民たちは感動していた。配付活動が終わって皆が戻り談笑していた時、トーレス氏も帰る用意をしていたが、この機会に壇上に上がって皆に一言話をしてくれるよう頼んだ。そしてその時はじめて彼が心を開いてくれたことを知った。

彼は「森林火災は非常に膨大な範囲に亘って影響を及ぼしていたので、損失は大きく、私たちは大変辛い思いをしていました。この悲劇が発生した後、慈済が初めて私たちに連絡してくれた時、実は半信半疑でした。地球の反対側にいる人たちが、こんな遠くの小さな町タンテラ市に、本当に関心を持ってくれているのだろうかと」と言った。トーレス氏は米国ニュージャージー州の陳済弘と何回も連絡を取り合っているうち、次第に心配や疑念は不要だと思うようになった。

そして、「今日の配付で私はとんでもない誤解をしていたことがわかりました。私は無神論者ですが、今日の配付を受けた人々が、真心のこもった善により尊重されながら配付を受けていた場面は、実に美しかった。それは宣教ではなく、被災者が愛され尊重されている姿で、実に驚きました。また美しい驚きでもあ

りました」と言った。「慈済の皆さんの大愛に対して、私たちが遠方からの援助など信じ難いと疑うことはもうありません！」。トーレス氏は美しい体験が得られたことを、このように感謝していたのだった。

リスボンに向かって出発してから

昨年六月に森林火災が発生した時は六十四人が犠牲になり、十月に再び火災が起きて、拡散した。この期間に私はポルトガルの首都リスボンのペトロ弁護士に紹介された。話をしてみると、ペトロ弁護士が愛の心に満ちた人であることが感じられた。なかでもシリア難民に関心を寄せているとのことで、十二月に出発する慈済のポルトガル火災支援隊にも熱心に協力して下さった。

彼は三日の内に、ポルトガルの救済活動を司るＣＣＤＲ－Ｃと連絡をとり、地方自治体と協力して被災の損害額をまとめ、ヨーロッパ連盟行政機構への報告、支援経費の申請など、私たちが被災状況に関して知らなければならないすべての情報を入手してくれていた。支援隊の任務が終わって、ポルトガルを離れる前夜、ペトロ弁護士は、自分は慈済のボランティアになって以後も連絡係を担うと言ってくれた。その後二カ月にわたり、どんな時にも慈済に対応してくれた上、購買券について慈済に代わって企業と交渉したり、情報を提供してくれたりした。

彼は民事と刑事を兼ねた弁護士で、仕事がどんなに忙しくても慈済を最優先にして、法廷に出ていても休息の合間に支援の事務をしてくれた。慈済に会って奉仕する機会に恵まれたことに感謝し、遥

●２０１７年１２月、フランス、米国、英国の慈済ボランティアの被災状況調査先発隊が中部発展委員会主席アンナ（左から４番目）に面会した。この期間にはペトロ弁護士（右から３番目）の協力があった。彼は慈済の種をこの地で発芽させ、末永く愛護し伝えていくと言っている。

か遠くから台湾の友人が援助の手を差し伸べているのに、ポルトガル人の自分はもっと努力しなければならないと言うのだった。

一回目の配付開始の時、ペトロ弁護士は従兄弟が自動車事故を起こして生死の境をさまよっており、急遽リスボンへ帰って処置するよう、父からの電話を受けた。彼は遺憾に思いながらもボランティアたちに別れを告げなくてはならなかった。前夜に幼い子供二人を連れ、五時間運転して摂氏〇度近い被災地に着いたと思ったら、また引き返さねばならない世の無常に、皆の心は重たかった。

誰もが関心を寄せなくてはならない

ペトロ弁護士とドイツ在住のボランティア楊沃福の二人が執り行うはずの配付に、急遽現地ボランティアのカルロス、メンドスが代理の命を受けて短時間で予行練習を行い、配付を無事に取り仕切った。メンドスは十歳の時に家族と共にポルトガルのワゼラ市に移民した。火災発生当時、被災地の只中に親戚がいた。猛烈な火の勢いに焦る心を抑えなければならなかったことは生涯忘れられず、その後は付近の被災家族に寄り添っている。

彼は地元メディアを通じて、慈済が配付を行っていることを知ると、会社を休んで通訳ボランティアに名乗りを上げ、慈済ボランティアが最も信頼する通訳菩薩になってくれた。現地ボランティアは自分が被災者かそうでなくとも被災者の友人であり親戚だという彼は、人々の気持ちに寄り添うことができた。慈済ボランティアも家庭や事業を差し置いて遠くの地域に赴き被災者に寄り添う。慈済の姿に民族、宗教、国を超越した「無縁大慈、同体大悲」を見た時、彼は最も感動して

●メンドス（左）は急遽命を受けて、ドイツのボランティア楊沃福と共に配付式典を取り仕切った。

●マリア（真ん中）はリタイアした英語教師。慈済ボランティアと被災者に寄り添い慰めている。

いた。

慈済人は助ける者でありながら、その態度は柔和謙遜であるという異なる斬新な文化を知ると、彼はただちに協力を申し出た。その後も慈済ボランティアの一員として、この愛を当地に延続させることを願っている。

だまって粘り強く傾聴する

ワゼラ市の配付式の最中、地元ボランティアのマリアは、法師が被災者に贈る慰問文を代読した。彼女の優しい容姿と落ち着いた声音は多くの被災者の心に響いていた。彼女はボランティアに付き添っていた四日間、通訳だけでなく、問診をする医師の手伝いをしたので、医師が患者に対し母親のように優しく応えていたのを見ていた。

マリアは高校教師をリタイアしたばかりで、多くのポルトガル人に特有の外国への好奇心と、世界の異なる文化を大らかに受け止める心を持つ。オーストラリアで十年居住した後に、故郷へ戻ってワゼラ市付近の山の上に住んでいた。国外に住んでいた間、アジア人と交流する機会が多かった。今回は慈済人に巡り会って、多くの啓発を得たと喜んでいた。

彼女が最も深く感銘を受けたことは、支援活動に参加している慈済ボランティアが交通費も、宿泊費や生活費もすべてが自費であることと、支援費用は普段から少額を集めていて、そのすべての金額が被災者のために使われていることだった。

「これは慈済人が随時、随所に布施する心理と見返りを求めないことを証明しています。私が慈済を好きになった理由です」と言ったマリアは、自分は金銭的に豊かではないが喜んで時間を捧げて奉仕し、慈済の力になりたいと言った。

マリアは「英国ポルトガル火災自救会」の関係者として通訳ボランティアとして参加した。これは英国の李宏耀医師の呼びかけによるボランティア団体である。タンテラ市のカーラ・アルメデアもこの呼びかけにより通訳に協力している。カーラは健康診断コーナーで四人の医師の通訳を受け持った。彼女は優しく人の言葉に耳を傾け、目線を合わせ、年配者には自分の親のように、子供には自分の子のように接していた。

彼女は裕福ではなかったが、自分のできることで人助けをしたいとその機会を探していたのだという。ネットを通じて支援を必要とする人たちを探し、訪問したが、その時、人々は家、農具、家畜のすべてを失っても、本当に必要としているのはいたわりと愛であり、それが未来に向かう力量の源になるのだと気づいた。それからは、彼らが安心して心の苦痛を訴え、悲しい記憶が薄れるように、カーラは自分の目線を下げて彼らに合わせるようにしたのだという。

愛を記憶に留めさせる

タンテラ市の人口は約三万人で、そのうち二百二十軒が全焼した。リタ・ロイオの家も全焼した。彼女の家族が再建を期待しながらも悲痛にくれていた時、被害調査に来た慈済に会った。彼女はまた観光客が来たと思っていたが、現地ボランティアの説明を聞いてその来意を了解した。しかし、寄り添い支援するために、ポルトガルの山の上にあるひなびた村にまで来るのは何故だろう?と思っていた。

配付活動の中で、通訳として協力していた時、彼女は何が無私の愛であるかを体得した。さらに儀式の中で慈済の歌に手話を交えた場面を見た時は感動を覚えていた。「今日見たすべては、永遠に私の記憶の中から消えることはありません。私の喜びと望みは、もう一度慈済の人たちと共に奉仕することです」と言った。

●慈済ボランティアは森林大火の村へ自費で赴き、被災者に寄り添い慰めている。

慈済国際・ポルトガル

ベストパートナーのジョセ

◎文・侯素秋（ドイツ）訳・本諦

「あとどのくらい待つのか？」とお婆ちゃんが何度も席を立ってきいた。お婆ちゃんの手を握ると、ジョセはすぐに私のために通訳してくれた。

通訳ボランティアのジョセはワザラ市の高校一年生だ。物資配付の前日、翌日の仕事の内容を訊ねるために同級生と一緒にやってきた。他の同級生が話を聞いて帰ったあとも、彼は居残って、会場の配置を手伝った。

彼は翌日最初に会場に到着した現地のボランティアだった。配付前の何分か前に、彼は「わあ、人が大勢来た！この村でこんな大勢の人が集まったのは初めてだ」と驚きの声を上げた。

最初の配付のときに、薄着のお婆ちゃんが杖をついて、黒いバッグを手にゆっくりと会場に入ってきた。実際には、お婆ちゃんは二番目の配付対象だった。

被災した家庭はほとんどが年寄りの農民だ。彼らは物質だけではなく、愛と寄り添いを通じて、災難後の再建に直面する勇気も受け取っていた。

ジョセはお婆ちゃんに座ってもらったが、二回も席から立って、「あとどのくらい待つの」ときいた。彼女は後ろにいるお爺さんを指さして、「乗せてもらってきたの。彼はもう帰るから、私ももう帰らないと」と言い、「あとどのぐらい待つの？」とまたきいた。

我々も焦ってきたが、配付活動が順調に運ぶためには待つことは必要だった。ジョセに頼んで、お婆ちゃんのことをきいた。誰と住んでいるのときいた。

お婆ちゃんはやや不機嫌に、ここ二十

●ワゼラ市政府の協力により、現地の英語が堪能な中学生達に通訳をしてもらい、年長者を会場まで支えて入場した。

年は一人で住んでいたが、家は焼けてしまったので、警察に救出されたこと、お婆ちゃんを乗せてきたお爺さんの家も焼けたことも教えてくれた。

私は本能的にお婆ちゃんの手をきつく握りしめて、ジョセの通訳を通じて、お婆ちゃんが一人ではないこと、全世界の慈済のメンバーが関心と愛を届けに来たことを伝えた。お婆ちゃんの目が二回ほど回って、唇を噛み、涙を堪えていたが、徐々に心が落ち着いてきたようだった。

彼女はジョセに、「貴方のことも貴方の叔父さんのことも知っているわ」と言った。十六歳のジョセは不思議そうにお婆ちゃんを見つめ、お婆ちゃんが語る田舎の話に耳を傾けた

ジョセの通訳で、お婆ちゃんは八十二年前の今日に生まれたことを聞いて、その話を再確認した。「本当に今日はお婆ちゃんの誕生日？」。それを確認したお婆ちゃんに、我々は一斉に、「お誕生日おめでとう」とお祝いの言葉をかけた。お婆ちゃんはずっと私の手をにぎり、我々の平安を祝福してくれた。

ボランティアの皆が、お婆ちゃんが物資をもらって早く帰れるように資料の記入を手伝った。その十分後、お婆ちゃんはまた現場に戻ってきて、ドアの前に立っていたボランティアを一人ひとり抱きしめ、キスをしたり、感謝の言葉を何度も言った。

このことはジョセを感動させた。彼は情熱的に同じ田舎の年長者達に挨拶をしたり、近所の人々に会釈したり、自分が田舎のために何か役に立てるのだということを実行できたのだった。

●ドイツ、イギリス、フランス、アメリカ、オランダ、ルクセンブルクの慈済ボランティアとポルトガルの現地ボランティアとが協力して、2日間にわたり3カ所で支援物資の配付活動を行った。

慈済国際・ポルトガル

愛は行動で簡単に示せる

◎文・李春生（ルクセンブルク）　訳・閻麗妮

青々とした山や花がいっぱいに咲いている野原は大西洋に隣接している。しかし、長かった夏の異常な旱魃に見舞われ、森林火災が起きた。山の岩肌はすっかり焼け焦げてしまったが、私たちは愛の繋がりで遙か遠くのこの国と巡り合えた。

二〇一八年二月の下旬、欧米六カ国からやってきた慈済ボランティアはポルトガルに到着して現地のボランティアと合流し、ポルト空港から車でワゼラ市に到着した。来る途中で快適な天気と豊かな自然に恵まれた美しい景色に感動したが、被災地の情景を目にした瞬間悲しい思いになった。焼け焦げた木々と黒くなった岩が悲惨さを物語っていた。

支援物資の配付活動を行ったとき、現地の住民の瞳はまだ苦痛の記憶に怯えているようだったが、その心には疑問があることが見て取れた。「なぜこの人たちは遙か遠くの地からわざわざ助けに来たのだろう」という疑問である。

彼らは慈済のボランティアと初めて視線を合わせ、挨拶の言葉をかけられ、一緒に歌を歌ったり、お互いに手をつないで抱擁したりした時、思わず涙を流した。胸に抱えていた疑問に答えが見つかったのだろう。答えは簡単だ。「愛」がその理由なのだ。

国籍や言葉、民族などが異なっていても愛は変わらない。愛さえあれば、互いに遠く離れていても、心は一つになる。今度の支援活動に参加した私たちにも分かった。それは愛というものは実に簡単に伝えられるということだ。温かい笑顔や握り合った手から感じた温もり、そして心を込めた寄り添いだけで愛は伝わる。

二月二十六日、ボランティアたちは次々にここを離れたが、同時に彼らの深い友情を持って帰った。全ての災難はいつか必ず過ぎていく。純粋な心で行われた善行の下に不安な気持ちも穏やかになるはずだ。

紺の上着に白いパンツ姿のボランティアたちは、知恵を用いてタイミングと方向を決め、愛の種を蒔き森林火災を癒したのだった。（慈済月刊六一七期より）

人心の向うところ

善と悪が綱引きし、
悪が善に勝った時、
この世は終わる！

◎文・釋徳仉／訳・済運

リサイクル活動は非常に有益

中部地区のリサイクルボランティアと生活ボランティア二千人が台中静思堂に集まり、歳末祝福式典に参加した。その時、證厳法師は今年のテーマ、「共に大愛で衆生に付き添い、あらゆる行動で地球を守ろう」に触れた。それはすなわち、人には愛があり、世の中には愛があることを互いに訴え合おうというものだ。もし、他人に対して冷淡で自分勝手であれば、互いに傷つき合い、この世も傷つくのである。

地球の温暖化は進んでおり、すでに「熱を出している」状態である。地球を健康にしたいなら、各個人が生活を見直し、節約する心で物を大切にし、省エネを心がけて二酸化炭素の排出を減らすことから始めなければならない。「地球を尊重して大自然を愛せば、大量のゴミを作り出したり、大気や土地を汚染することはありません。一人ひとりがリサイクル活動に専念すれば、物の寿命を延ばすことができるのです」と法師が言った。

リサイクルボランティアは日々、資源の回収と整理に励み、大愛感恩科技公司が新たに質の高い繊維製品を作り出していることは、回収した資源から再製する模範であり、全世界でその流れを重視し、着実に回収資源を再利用することに期待が寄せられている。資源の開発と石油化学工業の分野の製造を減らし

て地球に休息を取らせ、元気を取り戻させるべきである。

「再製毛布は慈済ボランティアの災害支援と貧困救済の足並みに伴って、数多くの国で苦難に喘ぐ人々の心身を温めており、リサイクルボランティアの愛は世界中に広まっています。心と頭を使って行動すれば、環境に優しく、自分も健康になるのです。リサイクル活動に専念すれば、煩悩も雑念もなくなり、手先が器用になります。これもリサイクル活動の効用です」と法師が言った。

また、「リサイクル活動は頭脳にも体にも良く、その上、苦難を助ける善行をしているのです。皆が仏法の道理を理解して心に刻み込んでいることを願っています。『福は実践する中で喜びを感じ、智慧は善に解釈して自在になることから得られる』のです。善行は福をもたらし、智慧を成長させます。人と良縁を結べば、人生は喜びに満ち、心は自在になれます」とも言った。

人災が起きれば、皆が負け

中部地区のメディア関係者との座談会で、大愛テレビ局の葉樹姍局長はこの世での善と悪の綱引きについて語り、メディアの重要性を訴えた。「法師によると、善と悪の綱引きはいとも簡単に勝ち負けが着くのです。というのは、大衆は衝撃的な言葉を好み、悪はいつも善よりも一歩先に進んでいるのです。しかし、一見、悪が善に勝っているように見えても、世の中を味方にはつけていません。溢れんばかりのニュースがあっても、いつまでも人の心に残るようなプラスの情報はなかなか広まらないのです」

「地水火風の四元素に関係する自然災害は、実は人間の欲望に起因しており、長い年月を経て災害に発展するのです。戦争による人災は、少数の人の偏った心に始まり、勝ち負けを競うも

のです。戦争が長い間終息しなければ、世界中の難民問題は解決できません。戦争の結果がどうであれ、誰もが負けであり、勝つ人はいないのです」

人間性を醜く表現すれば、簡単に人心を平静でないものにしてしまう。真善美の歴史を残し、台湾の美を見てもらうことが大切である。法師はメディア関係者がもっと慈済の活動に参加して、この世で苦難に喘ぐ人たちのために愛のエネルギーを発揮すると同時に、世の人に「真実を正しく報道する」ことを望んでいる。

正法を聞き、体で実践する

こんな仏教の物語がある。阿難尊者が百二十歳の時、「人生百歳になっても水に親しんでいる鶴を見かけなければ、一日の人生でそれを見る人に及ばない」と若い修行者が詠んでいるのを耳にし、阿難尊者はその修行者に間違っていると伝えた。「人生百歳になっても生と滅を理解していなければ、一日の命でそれを理解する人よりも劣る」

修行者は尊者のその話を師匠に話した。「阿難は年寄りだ。そういう話は信じない方がいい」と師匠が言った。阿難尊者は仏法の伝承がこれほどにも難しいことを目の当たりにし、溜息をついた。

人文広報ボランティアにその物語を話した法師は、「わずかな誤差で千里を失うのです。仏法を正しくこの世で伝承させる最も良い方法は、心して聞き、体で実践することです」と言った。

法師は慈済人文メディアの同僚たちが「知識を勝手に理解して報道する」よりも「体得したことを報道する」ことを望んでいる。「それは耳で聞いてから自分の考えに基づいて判断してい

るため、正確だとは言えないのです。しかし、実際に自分で体得したことは深く理解できるため、それを完璧に言い伝えることができるのです」

「知識には誤差があり、自分で障害を作ってしまいますが、智慧は清らかで心が大きく開かれ、何の障害もありません。仏法を聞くのは智慧を大きく成長させるためであり、学問として勉強するのではありません」

皆が真面目に仏法を聞いて、それを伝承し、同じ道を歩む者同士が学んだことを討論し合ったり、仮に間違って理解しても互いに修正し合うよう、法師は常々言っている。また、「もし、それでも疑問が残った場合は、機会を見つけて常住師匠や修行者に訊ねたり、花蓮に戻った時に教えを請うことです。自分の見方に捕われて意見が纏まらず、ますます逸れた形で仏法の伝承をしていてはいけません」と言っている。

（慈済月刊六一七期より）

慈済大事記五月

訳・済運

05・02	本日、行政院（国会に相当）初めての「国家マネーローンダリング及びテロ資金危険度評価報告」が行われた。慈済基金会の顔博文執行長は代表で出席し、7日に管理職会議にも出席する。
05・04	慈済ミャンマー支部はタイツ町スイナクン村の慈済簡易活動センターで米貯金をしている会員たちのために灌仏会と親孝行活動を行った。14の村から730人が参加し、日頃から貯金してきた米728キロを寄付した。

05・09	台東関山慈済病院は「愛を広める無償訪問散髪」活動を行った。在宅ケアチームの看護師たちと慈済ボランティアが池上郷を訪れ、長期ケア対象の人の散髪を行い、生活状況に関心を寄せた。
05・11	中国慈善連合会が四川省成都市で「震災から10年、汶川に敬意：社会の力による救済」討論会を開いた。慈済慈善志業基金会の顔博文執行長と執行長室の王運敬副主任が代表で参加し、慈済の由来と四川地震後の10年及び国際災害支援の足跡について述べた。
05・12	◎慈済モザンビーク事務所は灌仏会を行い、ショナ語に変えた〈讃佛偈〉、〈誠心祈三願〉の曲を流した。2668人の参加者にはボランティアや会員の他、数多くのゴミ山崩落事故の被災者が含まれている。

05・13	◎慈済ドイツ・ミュンヘン事務所は初めてグラソー市政府文化センターで灌仏会を行った。現地住民やシリア、アフガニスタン、パキスタンからの難民200人が参加した。そして、11人の難民がボランティアを担当し、会場の準備や活動の進行を手伝った。13日にはハンブルク事務所で灌仏会が行われ、約60人が参加する。 ◎イギリス・マンチェスターの慈済ボランティアはキリスト教会の会議室を借りて灌仏会を行い、16人が参加した。その翌日、長期的に関係を保っている女性のDVシェルターで2回目の灌仏会を行い、10人の入居者が参加し、ボランティアは彼女たちの近況に関心を寄せた。 ◎慈済52周年の三節句合同活動に合わせて、慈済インドネシア支

部と各事務所は同日、灌仏会を行い、延べ９８８１人が参加したが、２０１７年と比較して約一割減った。とくにスラバヤでは３００人が出席する予定だったが、教会爆弾事件の影響を受けて７６人が出席したのみに留まり、ボランティアが活動終了後に関心を寄せた。また、夜には事件があった現場でパンと飲物を配付して警察を慰労した。

◎慈済５２周年「仏誕節、母の日、慈済の日」三節句合同の灌仏会は、證厳法師を先頭に花蓮静思堂で行われ、「０２０６花蓮地震」の救助隊員と被災者３５００人も参加した。高雄静思堂では初めて屋外の道路も会場の一部に取り入れ、３０人の長老住持が灌仏会の先頭に立った。その中にはベトナム、インドネシア、中国、タイ、フィリピン、カンボジア等６つの国籍の住民１５０人も各自伝統衣装を身に纏って敬虔に参加した。

０５・１３

◎慈済５２周年の「仏誕節、母の日、慈済の日」三節句合同の灌仏会は世界３７の国と地域で合計５０１回行われ、２５万人以上が参加した。今年から台湾では灌仏会と環境保護を融合し、花蓮静思堂、屏東体育館に「水立方」と題したオブジェが据え付けられ、水の節約を訴えた。台北中正記念堂には２０００本のペットボトルで作られた環境保護を意味する地球儀、そして、宜蘭、台南、台中、大甲ではボランティアがペットボトルから作成した提灯、造花などが飾られ、資源の再利用と物を大切に使う観念を広めた。

◎慈済台東事務所は本日、静思堂で灌仏会を２回行い、７００人近い人が活動を盛り上げた。中でも太麻里・香蘭村の蕭惠明村長と村民の劉文祥さんが特別参加したが、収穫したばかりの藜（レッド・キヌア）と製品を持参し、慈済の台風ニパート被害への支援及び慈済科技大学の香蘭

	村への藜の栽培技術の伝授で農民の生計を支援したことに感謝した。 ◎チリの慈済ボランティアはマクール市のアタルデセル養老院を訪れ、冬季の暖房用燃料費を寄付すると共に、灌仏会を行った。 ◎慈済カナダ支部は今年、灌仏会を大殿で行い、２５８人が参加した。また、ブリティッシュコロンビア州政府とバンクーバー市はこの日を「慈済の日」と定め、証書を授与した。
０５・２０	北区人医会と桃園市労働局は合同で桃園駅旧駅舎で外国籍労働者のための健康診断を行い、漢方科、歯科、皮膚科、内科などの施療と衛生教育を行った。
０５・２２	慈済骨髄幹細胞センターは５月に骨髄寄贈が５０００症例に達した。本日、「髄縁５０００・無限の愛」感謝会が開かれ、《阿孫がマッチング成功した》公益記録映画を上映し、寄贈者に感謝した。また、動画を通して大衆の骨髄寄贈に対する疑問に答えた。
０５・２３	◎慈済基金会は視覚障害者が手に職を付けられるよう、「台湾盲人再建院」主催の第６１回丙クラス按摩養成クラスを資金面で支援した。本日、慈済基金会の顔博文執行長と当院の曾瀚霖董事長が公益合作の覚え書きを交わした。 ◎慈済科技大学と花蓮慈済病院は学術研究開発に於ける合作で契約を結び、双方が研究、技術移転、コンサルティングなどで協力すると共に、学生の臨床実習と教育、シンポジウム、実務指導などに力を入れる。 ◎慈済基金会は５０床のジンスー多機能折畳式ベッド（福慧ベッド）を嘉義県消防署に贈呈した。消防人員が長時間交替で災害援助したり訓練に参加する時の休息の質を高めるのが目的である。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 台北県新店市建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中県潭子郷豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
FAX:886-4-36021123

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301
FAX:886-3-8563604

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ハワイ支部（Honolulu）
TEL:1-808-7378885

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ
TEL:1-760-7686631

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス
TEL:44-20-88699864

フランス
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

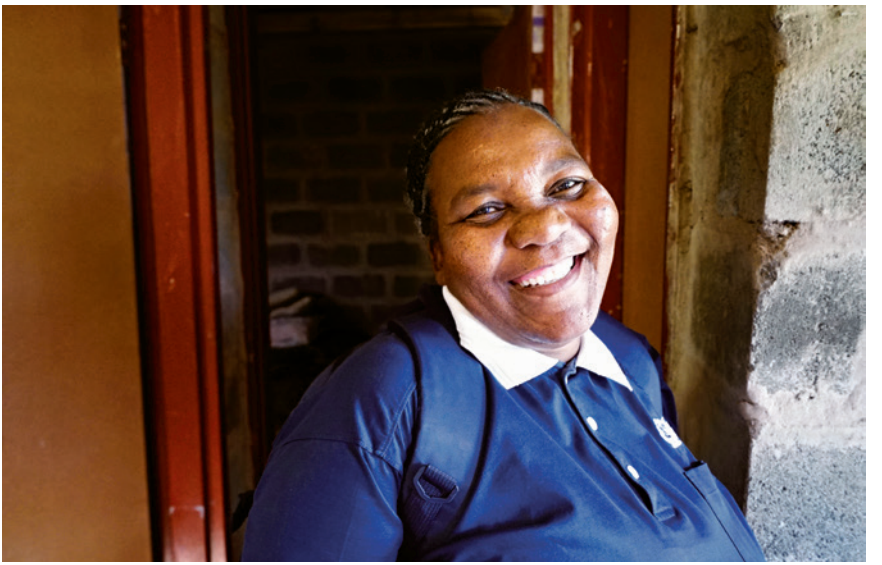
２０１８年６月１５日発行・２５８号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・王麗雪
校　閲　山田智美
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）



最高の笑顔　南アフリカ

７年前、破損していた土の家屋が暴風雨で倒れたが、自分のその窮境を後回しにして慈俅師姐（Joyce Nkosi）は、年１回の南アフリカ現地ボランティア幹部研修キャンプに従事した。キャンプが終了してはじめて、倒れた家屋を片付けるために急いで自宅に帰らなくてはならない、と打ち明けたのだった。

慈俅師姐はダーバン国際ボランティアチームの主要幹部だ。毎月国境を超えての貧困者訪問ケアに参加し、自分より貧しく苦しい人々をケアしている。「豊かな心」をもつことが何よりも幸せだということを示してくれた。

（文・袁亞棋　撮影・蕭耀華　南アフリカダーバン）

慈済ものがたり